

授業実践力の育成をめざした教育実習後の教員養成教育の一試案

—教職実践演習を見据えた社会科における隣接学校園との連携—

永田 成文*

I. 教育実習後に求められる授業実践力の育成

教育職員免許法施行規則の一部が改正され、2010年度以降に入学する学生に、教職実践演習(2単位)が必修科目として位置づけられた。これは、教員として必要な知識技能の修得を確認することを目的とし、教職課程の総仕上げとして4年次後期に設定されている。教職実践演習の授業内容は、①使命感や責任感、教育的愛情に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項が、授業方法は、役割演技、グループ討議、事例研究、現地調査、模擬授業等が示され、現職教員の授業や学校・教育委員会との連携も視野に入れられている¹⁾。児童・生徒は教員に対して学業面の指導を第一に期待しており、教職実践演習に実現可能な内容として、教科・保育内容等の指導力に関する事項が考えられる²⁾。

三重大学教育学部は学部目標の1つとして児童・生徒理解・教科指導・授業運営という教育現場における最も重要な課題を克服する力である教育実践力の養成を掲げており、講義により得られた知識と教育現場における体験的学習を有機的に結合させることにより養われるとしている。また、教育実践力を育成する場として、附属学校園(附属幼稚園・附属小学校・附属中学校・附属特別支援学校)に加えて、教育学部に隣接する学校園を設けている³⁾。

藤田ほかは、「教員が子どもたちの教科に対する好奇心を興味を呼び起こす力」を教科力と規定し、単なる教科内容にかかわる学力ばかりでなく、子どもたちから学習意欲を引き出す力としている⁴⁾。本稿では、教科内容に関わる学力による教材研究をもとに、授業において実際に児童・生徒の学習意欲を引き出すことのできる力を授業実践力ととらえる。授業実践力は教員養成学部の学生として身につけておくべき力であり、教員となってからも磨きをかけ続けなければならない力である。教員養成学部では教育実習後においても授業実践力の育成が求められることを踏まえて、教職実践演習を設定していく必要がある。

教職実践演習において、授業実践力を育成するために模擬授業を導入することが考えられる。教材研究、学習指導案・板書計画・発問計画・作業のプリント・教材等の作成による授業設計により、授業実施にいたる一連のことを学生に体験させることによって教員としての実践的指導力を

育成できる⁵⁾。隣接学校園との連携を活用し、学生が児童・生徒とのやりとりを想定して授業設計し、実際に授業実践を行っていくことは模擬授業よりもより授業実践力を育成できる。

本稿では、教職実践演習を見据え、授業実践力の育成をめざした教育実習後の教員養成教育の一試案として、社会科における隣接学校園との連携による授業実践を提案し、その成果と課題を明らかにしていく。

II. 隣接学校園と連携した社会科地域学習の教材開発

1. 社会科における隣接学校園との連携

三重大学教育学部と隣接学校園の連携は、連携校からの授業の依頼という形で行われ、該当講座で受諾できるかを検討している。また、活動に関わる主体について、教員か学生か、その両方が関わるのかは連携校の担当者と相談の上で決定するようになっている。

社会科に関わって、2010年度と2011年度に津市立西が丘小学校から、小学校社会科3・4学年の内容である、「物を売るための苦労や工夫」、「地域の発展に尽くした先人」についての授業の依頼があり、受諾した⁶⁾。依頼された授業は小学校社会科中学年の地域学習である。

今谷は地域学習の教育的意義として、生活上の欲求や必要性に裏付けられた効果的な学習の素材となり子どもの意欲や関心を高めること、子ども自らの目や耳で確かめながら学習することが可能で基礎的な学習方法の獲得ができること、地域の社会生活の全体的構造が社会をとらえる枠組みという基盤的知識となること、日々の生活に直接大きな影響を与えるため社会参画の態度を形成することを挙げている。また、実践上の課題として、教師自身がその地域についての十分な理解をしていなかったり、教材として活用できる資料を十分に用意できないことや、どのような観点から内容を構成し、どのような手順と方法で学習を進めていけばよいのかが曖昧となっていることを指摘している⁷⁾。

小学校社会科地域学習は社会科教師として教育現場で必要とされる授業実践力と密接に関わっている。なぜならば、社会科教育コースにおける教科教育や教科専門の研究手法をもとに、自らの力で現地を調査し、教材を作成していく力が求められるからである。

* 三重大学教育学部社会科教育講座

2. 社会科地域学習の教材開発

社会科地域学習は「公民的資質の基礎を養う」という小学校社会科の究極目標の土台作りとして、学習指導要領に示されている目標の「地域社会の一員としての自覚をもつ」と「地域社会に対する誇りと愛情を育てる」ことに関わっている。社会科地域学習は、地域の社会的事象をつかみ、それに関連して生じている問題を追究することによって、児童なりに地域社会について思考・判断し、将来の社会の一員として参画できる人材を育成することが望まれている。そのため、地域の問題をもっと「知りたい」という知的欲求と、地域の問題を「考えたい」という問題設定が必要である。また、児童に社会科としての問題をもたせ、ねらいを達成できる素材を準備しなければならない⁸⁾。

2010年度に依頼のあった「物を売るための苦労や工夫」は学習指導要領の地域の人々の生産や販売の内容と関わっている。ここでは、それらの仕事に携わっている人々の工夫を考え、自分たちの生活を支えていることをつかみ、地域の商店などから自分たちの生活に必要なものを購入したりしていることなどを取り上げることが示されている。このことは、地域社会の一員としての自覚をもつことにつながる。物の販売は消費者のニーズによって成り立っている。物を販売以外のお客さんに来てもらうための工夫をとらえさせていくことも必要である。

2011年度に依頼のあった「地域の発展に尽くした先人」については、学習指導要領では地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心をとらえるようになっている。開発、教育、文化、産業などの地域の発展に尽くした先人を取り上げ、それらの先人の働きや苦心が地域の人々の生活の向上に大きな影響を及ぼしたことを考えていく。このことは、地域社会に対する誇りと愛情を育てることにつながる。

2010年度と2011年度の西が丘小学校との連携授業は、教育実習を3年生と4年生で経験している学生を主体として大学教員が補助する形をとった。この教育実習後の授業実践は、社会科における授業実践力を育成することを目的とし、2010年度は学生の教科教育の専門性を生かした社会科地域学習の実践、2011年度は学生の教科内容の専門性を生かした社会科地域学習の実践として位置づけることができる。

Ⅲ. 教科教育の専門性を生かした社会科地域学習の実践

1. 実践までの概要(2010年度)

津市立西が丘小学校から対象学年3年、活動総時数4時間(1時間×4クラス)、活動期間9月後半から10月前半で「スーパーマーケットやお店の仕組みを簡単に教えてほしい、物を売るための苦労や工夫などを教えてほしい」と

いう依頼があった。3学年で暮らしを支える町で働く人々の工夫や努力をとらえるために店を見学に行くので、事前に物が売られる仕組みを教えてほしいということであった。

表1は2010年度の西が丘小学校との連携の流れを示したものである。授業は、地域のシンボルである大門商店街の人々の工夫を素材とし、社会科教育の授業づくりを研究している教科教育を専門とする4年生に依頼した。連携担当教員と日程や教材等について電話で連絡を取り合い、1時間授業を4クラスで行うことになった。

表1 2010年度の西が丘小学校との連携の流れ

事前連携	
(1)連携校の依頼と担当学生の選定(7月)	
(2)連携担当教員との日程、教材等確認(7～9月)	
(3)授業担当学生との授業実践検討(9月)	
授業実践	
実践1	2010. 9. 27(月) 2限目 (3年4組)
実践2	2010. 9. 27(月) 3限目 (3年3組)
実践3	2010. 9. 28(火) 1限目 (3年2組)
実践4	2010. 9. 28(火) 2限目 (3年1組)

学生は三重大学附属小学校の教育実習の単元「大門商店街」(全6時間)において、3学年の児童と大門商店街を見学に行き、気づいたことやわかったことをまとめさせ、大門商店街とその他のお店の特徴を比較させ、大門商店街によりお客さんを呼ぶためにはどのように変わっていった方がよいのかを話し合わせた経験があった。教育実習で行った教材研究をそのまま生かす形で本時「大門商店街のお客さんを呼ぶための工夫」を学生と共に考えていった。

授業は9月27日の2・3限と9月28日の1・2限に4クラスで実施し、4時間とも同じ指導案と教材を基に実践した。1時間ごとに授業方法のアドバイスをを行い、学生は各クラスで少しずつ改善していった。同じ社会科教育コースの4年生の学生が同行した。

2. 授業計画(2010年度)

本時の目標は、「大門商店街では多くのお客さんを呼ぶために、雨除けのためのアーケードやイベントをしたりするなどの工夫をしているが、それでもお客さんが少ないことを知り、他にどのような工夫ができるのかを考えることによって大門商店街の人たちの苦労や工夫に気付くようになる。」である。

単元の授業展開を示したものが表2である。1時間授業では大門商店街の見学を設定できないので、お客さんを呼ぶための工夫についてとらえさせるための写真を活用した。授業の流れは①の写真から大門商店街の様子やお客さんが

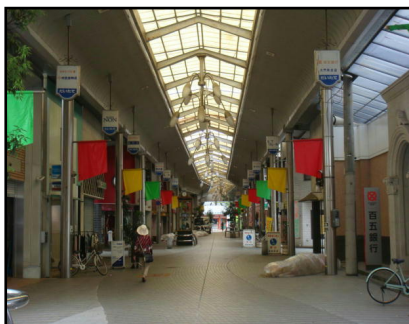
少ないという現状を知る。大門商店街で実際に行われている工夫を写した②～⑧の写真からどのような工夫がされているのかを考える。このような大門商店街の人たちの苦労や工夫に気付いた上で、工夫しているにも関わらず人が少ない理由を考えた上で、お客さんが来るためのよりよい

工夫を提案するようになっていく。お店がたくさん開いている時間にお客さんが少ないという問題を発見し、中心発問「お客さんを呼ぶために工夫しているのになぜ人が集まらないのか」を設定している。

表2 本時「大門商店街のお客さんを呼ぶための工夫」

学習活動	指導者の働きかけと予想される子どもの反応等	資料等
1. 大門商店街の現状をつかむ。 1-1 大門商店街を意識する 1-2 大門商店街の様子 1-3 お客さんが来る時	<ul style="list-style-type: none"> ・大門商店街の写真を黒板に貼り、「ここはどこか分かりますか。」と問う。児童は「どこかのお店」「見たことある」「大門商店街」などと言ってくるだろう。 ・何人かの意見を聞いたら写真に写っているのが大門商店街だと伝え、「大門商店街に行ったことがある人はいますか。」と聞く。この時、行ったことがあると答えた子に「どんなところだったか。いつ行ったか。」ということを問い返すようにする。その後、「お店が集まっている商店街を私と一緒に勉強します。」と言う。 ・もう一度最初に提示した大門商店街の写真を指しながら「この写真の大門商店街はどんな様子かな。」と問う。児童は「お客さんが少ない」「暗い感じがする」などと言ってくるだろう。 ・次に、「この写真は何時頃の大門商店街だと思いますか。」と問う。児童は「光が漏れているから昼間」「お客さんが全然いないので夕方」などと言ってくるだろう。その後、大門商店街のお店は午前9時から午後6時くらいに開いていること、写真は12時30分に撮影したものだということを伝え、「お店がたくさん開いている 時間なのにお客さんが少ないですね。」と言う。 	写真①を黒板に貼る。 写真①に着目させる。 写真①に着目させる。
2. 大門商店街にさらに必要な工夫を話し合う。 2-1 大門商店街の工夫 2-2 なぜ人が少ないのか 2-3 その他考えられる工夫 2-4 まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・7枚の写真を貼り、「大門商店街の人たちはお客さんを呼ぶために様々な工夫をしています。いくつかの工夫を写真に撮ってきたのだけれど、この写真の中からどのような工夫が分かりますか。」と問う。この時、何のために屋根を付けているのかというように理由も確認していく。児童は②「七夕をしている」③「駐車場が安くなっている」④「からくり時計を置いている」⑤「屋根がある」⑥「ベンチで休めるようにしている」⑦「金魚がいる」⑧「取れたての野菜などを売っている」などと言ってくるだろう。 ・「大門商店街ではこれだけ多くの工夫をしているのに人が集まっていないのはどうしてだと思いますか。」と問う。児童は「暗いから」「よいお店がない」「他のところに行っている」「あまり知られていない」などと言ってくるだろう。だいたい意見が出たら、児童の意見に付け加えて、他に大型のショッピングセンターができたことや交通の便が悪いなどの理由もあることを伝える。 ・「では、さっき出てきていた工夫の他にお客さんを呼ぶために大門商店街の人たちはどのような工夫ができていると思いますか。」と問う。大門商店街の地図と意見を書く用紙を配布し、まず個人で考える、その後、隣同士で意見を交換した後に、「自分の意見を発表してみましょう。」と問う。児童は「駐車場をずっと無料にする」「安い商品を置く」「お店のチラシを作る」などと言ってくるだろう。 ・だいたい意見が出たら、大門商店街の人たちはどうしたらお客さんが来るようになるのかを考えながら努力を続けていること、また、人と人との関わりを大切にするという気持ちで商売をしているということを伝えて授業を終える。 	写真②～⑧を黒板に貼る。 大門商店街の地図(情報マップ)とワークシートを配布する。

※太字は児童の問題発見場面。筆者の指導をもとに学生が作成



① 大門商店街の様子



② 七夕祭りの催し



③ 駐車場1時間無料



④ からくり時計



⑤ アーケードの屋根



⑥ アーケード外のベンチ



⑦ 金魚の飼育



⑧ 五十市での販売

3. 教育実習後の授業実践力の育成

学生が授業で工夫した点は、児童が興味を持てるように写真を多用し、2クラスごとに②～⑧の写真の提示の仕方を変えたことである。写真を1枚ずつ提示して写真ごとの細かい工夫を見つける方法から、後半は一度にすべての写真を提示し、児童が工夫を考える時間をじっくり設けるようにした。また、大門商店街は津で一番大きい伝統的な商店街であるという説明の追加や、資料配付や板書の仕方を適宜改善していった。

学生は、授業後の感想で、3・4年生と附属学校での教育実習で学んだ成果を公立小学校でためす絶好の機会であったこと、現場で児童の様子を知る貴重な場となったことを述べており、授業計画や児童対応に関わる授業実践力が高まったことがわかる。

IV. 教科内容の専門性を生かした社会科地域学習の実践

1. 実践までの概要

津市立西が丘小学校から、対象学年4年、活動総時数4時間(1時間×4クラス)、活動期間2学期で「地域の発展に尽くした先人」についての授業をしてほしいという依頼があった。人物については一任ということであった。

表3は2011年度の西が丘小学校との連携の流れを示したものである。歴史学という教科内容を専門とする4年生に依頼し、話し合いの中で、地域の稲作に必要な用水路の開発に貢献した「西島八兵衛」を素材として取り上げることになり、連携校にも受け入れられた。学生と共に本時「雲出用水と西島八兵衛」を考えていった。

表3 2011年度の西が丘小学校との連携の流れ

事前連携	
(1)連携校の依頼と担当学生の選定(4～5月)	
(2)連携担当教員との日程、教材等確認(6～9月)	
(3)授業担当学生との授業実践検討(8～9月)	
授業実践	
実践1	2011. 9.28(水)3限目(4年4組)
実践2	2011. 9.28(水)4限目(4年1組).....
実践3	2011. 9.29(木)3限目(4年2組)
実践4	2011. 9.29(木)4限目(4年3組)

学生は日頃の日本史研究の成果を生かし、中学年教材『わたしたちの津市』の中の「雲出用水をつくる」という文章を参考として、西島八兵衛の働きをつかみやすいように改善した。また、現在の雲出用水の現地調査を行った。連携担当教員と日程や教材や教具についてメールで詳細にやりとりした。

授業は9月28日の3・4限と9月29日の3・4限の4クラスで実施し、4時間とも同じ指導案と教材を基に実践

した。1時間ごとに授業方法のアドバイスをを行い、学生は各クラスで少しずつ改善していった。同じ社会科教育コースの2年生の学生が同行した。

2. 授業計画(2011年度)

本時の目標は、「雲出地域は雲出川の水面よりも水田の標高が高いという地理的な特徴をもつことから、江戸時代の雲出地域における雲出用水の必要性と、それが現在も地域の農業に欠かせないものであることを理解し、工事にのぞむ西島八兵衛や地域の人々の思いを考えることができる。」である。

単元の授業展開を示したものが表4である。現地調査による写真をもとに、現在の雲出用水からその必要性について歴史的に考察するように工夫した。授業の流れは、写真①、③、④を利用して雲出地域が米を作っているという地域であることをつかみ、図1の模造紙を利用して水田と雲出川の高低差と雲出用水網から雲出川から用水路を引いていることを理解する。次に文章資料を利用して、西島八兵衛が指揮し、2年かかって完成させた雲出用水の歴史とともに、村人は工事はつらいが、安心して米作りがしたいために雲出用水を作ったことをつかみ、現在も地域の農業に活用されていることから地域の発展に尽くした先人であることをとらえるようになっていく。雲出地区が水が不足している地域であるという問題を発見し、中心発問は「西島八兵衛と村人はどのような思いで工事を続けたのだろう」を設定した。児童は八兵衛も村人も用水路を一刻も早く作りたい気持ちであることに共感した。また、人々は八兵衛のことをどう思っていたらうと問うことで、現在でも感謝され続けていることを理解できた。

3. 教育実習後の授業実践力の育成

学生が授業で工夫した点は、導入で教材提示装置により写真を見せることで雲出地区の様子をイメージさせ、雲出用水の文章資料を人物に共感できるように活用したことである。八兵衛は当時の村人にとってどんな存在か、現在ではどんな存在かを考えさせることにより、児童は地域の発展に尽くした先人であることをつかんだ。

1日目の2時間の授業は、雲出用水の歴史的背景の場面で、人物、工事の様子、工事の工夫について資料からの読み取りに時間をかけすぎたため、八兵衛と村人の工事に対する思いについてじっくり考える時間や、八兵衛の功績から地域の発展に尽くした先人であることをとらえることが不十分となった。この反省を2日目に生かし、雲出用水を作る人々の思いの場面、八兵衛に対する村人の思いに時間をかけるように改善した。授業者は現地調査で地域を教材化することや児童の集中力を持続させることが大事であると再確認しており、授業計画や児童対応に関わる授業実践力が高まったことがわかる。

表4 本時「雲出用水と西島八兵衛」

学習活動	指導者の働きかけと予想される子どもの反応等	資料等
1. 雲出川周辺地域の地理的な特徴をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> 「これは何の写真だと思いますか」と問いかける。 児童の反応予想 写真1:「川」「水路」写真2:「人の像」 西が丘小学校と雲出地域の位置を確認し、写真1は雲出地域であることを伝える。 「この写真から雲出地域はどのような地域だと思いますか」と問いかける。児童の反応予想「田んぼ」「米づくりをしている」 雲出地域は主に水田として利用されていることを確認する。 「米づくりに必要な水はどのようにして得ているのでしょうか」と問いかける。児童の反応予想「雲出川」「雨」「用水路」 写真4で雲出川と水田を確認し「どちらが高く見えますか」と問い、挙手を促す。児童の反応予想「田んぼの方が高く見える」 図2から、雲出川の水面が田んぼよりも高さが低いことを確認し、雲出川から堤防をこえて直接水を田んぼに送ることができないことをつかむ。 図1に水路網を重ね、雲出用水と呼ばれる人工的につくった水路を用いて雲出川上流から田んぼに水を引いていることを伝える。 	<p>写真1, 2を大型テレビ</p> <p>図1を黒板</p> <p>写真3を大型テレビ</p> <p>写真4を大型テレビ</p> <p>図2を大型テレビ</p> <p>図3を図1に重ねる</p>
2. 雲出用水をつくる人々の思いを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートの本文(前半)を読ませ、江戸時代の雲出地域の水不足の状況や雲出用水の歴史をつかみ、ワークシートを埋めていく。 ＜確認項目＞ ①どんな人物か・・・たくさんのお城やため池をつくった土木工事の専門家 ②どのような工事か・・・くわなどを使って村の人々の力で用水路をほる。工事が進まない日があったり、けが人が出たりした。 ③八兵衛の工夫・・・用水路にだんさを作り、水の速さを調節した。 水がふえすぎないように、雲出川にもどす。 「西島八兵衛と村人はどのような思いで工事をつづけたのだろう」 児童の反応予想:＜八兵衛＞「用水路を完成させて、村人を助けたい」＜村人＞「用水路があれば安心して米づくりができる」 ワークシート本文(後半)を読み、西島八兵衛は用水路工事だけでなく管理についての決まりも作り、使い続けることができるように心を配ったことをつかむ。 	<p>ワークシート</p> <p>ワークシート</p>
3. 西島八兵衛が地域の発展に尽くした人物であることを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 「村人は西島八兵衛をどう思ったのだろう」と問いかける。 児童の反応予想「八兵衛のおかげで用水路をつくることができた」 写真2を再度確認し、雲出用水は現在も地域の人たちの農業に欠かすことができないものであり、西島八兵衛が地域の発展に尽くした人物であることをつかむ。 	<p>ワークシート</p> <p>写真2を大型テレビ</p>

※太字は児童の問題発見の場面。筆者の指導をもとに学生が作成



① 雲出用水の様子



② 銅像



③ 地域の土地利用



④ 川との高低差



図1 模造紙

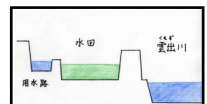


図2 断面図



図3 水路網

資料1 ワークシートの本文部分

雲出(くもず)用水を知ろう

今から360年前、^{くもず}雲出地域の村人は、雨水をたよりに米や野菜をつくっていました。そのため、晴れの日がつづくと水がなくなってしまうことがよくありました。あるとき、まったく雨がふらず、いねや野菜はほとんどかれてしまい、村人は食べるものがなくなっていました。

このようすを聞いた津のおとのさまは、家来の西島八兵衛に村人をすくう方法を考えさせました。西島八兵衛はたくさんお城やため池をつくった土木工事の専^{せんもんか}門家^{もんか}でした。八兵衛は雲出川や雲出地域を調べ、用水路を作って雲出川の上流から水を田んぼに流す事を計画し、村人にこの計画を伝えました。村人も水の心配をしなくて済んだので、田植えやいねかりの時以外はみんなで工事に参加しました。

八兵衛はおとのさまにお願いして先頭に立って工事の指示をし、村人も一生けん命働きました。



村人はくわで土をほってみぞをつくり、ほった土を運ぶなど手^て分けをして工事をしました。この工事には女の人もお年よりも参加しました。八兵衛は用水路の中にだんさをつくり、水の速さを調^{てう}節^{せつ}したり、用水路を流れる水がふえすぎないように雲出川に水をもどすなどの工夫をしました。しかし、工事がうまく進まない日があったり、けが人が出たりしました。それでも、村人は自分の田んぼへ水が来るように一生けん命用水路を作りました。

そして、2年かけて全長13kmの雲出用水が完成し、村人の田んぼに水が行きわたるようになりました。八兵衛は雲出用水ができたあと、用水路がこわれたら、すぐに直す事や水をめぐって村がけんかをする決まりをつくり、用水路を使いづけることができるようにしました。

(『わたしたちの津市』を参考に学生作成)



V. 成果と課題

教育実習後の教員養成教育の一試案として、2010年度は教科教育の専門性を生かした社会科地域学習の実践、2011年度は教科内容の専門性を生かした社会科地域学習を実践し、それぞれ学生の授業実践力を高めることができた。

二つの実践に共通していることは、学生が所属する社会科教育コースの専門性を生かし、地域を調査して教材を自ら作成していることである。また、児童が追究できる問いを設定し、それを追究することでよりよい社会について考察するようになっている。学生は教育実習の経験を基に、指導者の働きかけによる児童の反応を授業前にほぼ正確に把握し、児童から予想とは異なる意見が出た場合でも、適宜修正して対応することができた。学生は教育実習で得た知識や技能を基盤とし、教科力を生かして教材研究を行い、児童に柔軟に対応する力を身につけたと言える。

学生が卒業して就職するのは一般の公立学校である。隣接学校園との連携による授業実践は、学生が一般的な公立学校の担当学年の児童を想定して教材研究を行い、教育実習で体得した対話力・適応力で児童に対応することが求められる。二つの実践は、教職実践演習で求められている教員として必要な知識技能の修得を確認する内容や方法のモデルとなりうる。

課題として、隣接学校園との連携が不十分であることが挙げられる。4時間の授業の合間に、2010年度は担当教員から感想を、2011年度はアドバイスを頂いた。今後、より学生の授業実践力を育成するために、単なる大学への授業の依頼ではなく、授業構想の段階から隣接学校園の教員が加わり、実践後に反省会を設けていく必要がある。また、教職実践演習への導入を見据えた場合、4つ程度の単元を設定し、学生がそれぞれグループとして所属し、一回ずつ授業を行うことが考えられる。学生がお互いに授業を行い、評価し合うことで、より授業実践力が育成されと考えられる。

【註】

- 1) 授業は演習形式で行われることが前提となっている。中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(答申)文部科学省、2006
- 2) 新任教員として身につけておきたい資質と能力の視点からである。渡辺克己「教員養成の充実に関する一考察ー期待される教師の育成を目指してー」北里大学一般教育紀要 16, pp. 128-130, 2011
- 3) 教育実習の他、学生が教育現場で児童・生徒と関わる機会を設け体験と知識を結びつけている。<http://www.edu.mie-u.ac.jp/education/fc-overview/index.html>
- 4) 「教科」とは文学部などの専門学部でない教員養成を使命とする教育学部の独自性の学びであるとしている。藤田達生・永田成文・川端康「教員養成段階の『教科力』育成のためのカリキュラム開発」『日本教育大学協会研究年報』第28集, p. 202, 2010
- 5) 実践的指導力は授業設計力と授業実践力から構成されるとしている。長友大幸・中込雄治・生野金三「教職実践演習の実証的研究ー教員としての資質能力の基礎の育成を志向してー」埼玉学園大学紀要人間学部篇第10号, p. 180, 2010
- 6) その他の隣接学校園と社会科教育講座との連携は三重大学教育学部『隣接学校園との連携を核とした教育モデル』平成22年度・23年度報告書を参照されたい。
- 7) 地域を日々の生活の基盤となり、共同体の構成員として自覚を高めるための最も身近な空間ととらえている。今谷順重「中学年：地域学習の学習指導案について」全国社会科教育学会編『小学校の“優れた社会科授業”の条件』明治図書, pp. 12-14, 2007
- 8) 授業において教材研究して見つけた素材の全てを子どもに提示するのではなく、必要かつ最小限のものをいくつか選ぶとしている。長谷川康男『子どもが社会科で問題意識をもつ10のポイント』学事出版, p. 13, 2006